
ユグドラシルの樹の下で

paiちゃん

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ユグドラシルの樹の下で

【Nコード】

N7642Y

【作者名】

paiちゃん

【あらすじ】

俺の姉貴は1歳違いで隣に住んでいる。本当の兄弟じゃないけど、生まれたときから世話になってるらしい。そんな姉貴には密かな願いがあったようだ。異世界で暮らしたいって、そんな願いに俺は巻き込まれてしまった。さらには、異世界には危険が一杯って・・・なんでそんなの持つて来るんだよ。っていうか、何処で手に入れた！・・・まあ、異世界なら仕方ないかなって俺も流されてるし・・・とりあえず姉貴と2人でなんとかこの世界で暮していかないと・・・こんな決心で異世界暮らしを始める男の子の物語です。

俺の姉貴

小さな焚き火の前に座った俺に、姉貴は「はい！」ってカップを差出した。

夜の森は静かで、何の物音も聞こえない。

時折、薪のはぜる音がパチパチと小さく聞こえる。

隣で、カップのコーヒーをフーフー息を吹きかけながら飲んでいる姉貴を見ると、俺の視線を感じたのか、此方を見て微笑んでいる。全く余裕があると言うか、無頓着と言おうか・・・

そもそも、こんな所で焚き火をしている原因となったのも姉貴のせいだと思ってしまう。

昨日の夕方、家に来たかと思ったら、「明日は、キノコ狩りだよ！」と言って帰っていった。

それからが大変だった。

とりあえずザックを取出し中身をぶちまけて再度詰め直す。

エマージェンシーキット、緊急薬品、非常食、携帯調理用の鍋と食器、シエラカップに固形燃料・・・

さらに、マルチプライヤー、ナイフ、軍用水筒、そして着替え一式と予備の圧縮下着一式だ。

これだけ詰め込むとパンパンにザックが膨らむが、まだ、ポケットがある。そこに、お菓子を入れると準備完了だ。

玄関にGブーツを出しておき、部屋に戻ると、枕元に着ていく物を準備する。

ジーンズにGシャツ、トレーナーそれに厚手のソックスを畳んで置く。

最後に押入れの奥から、山菜採取用の鎌を取出す。

樫の杖だ。上部はネジが切っており、其処に鎌をねじ込むが、何と鎌は鍛造品、鎌と言うより鳶口を削って刃を付けたような形状だ

が、山菜取り用と言っている訳ではしょうがない。

次の日、朝6時に起きて朝食のパンをコーヒーで流し込み玄関先で待つことしばし、トコトコと姉貴が同じような服装で現れた。

同じような服装には理由がある。

俺の服は、下着に至るまで姉貴の趣味で、姉貴が購入したものだ。
「はい。これをお願いね！」ってお金を渡す俺の母にも問題はあ
るのだが・・・

背負ったザックは俺よりも大型だ。

と言うことは、今回もとんでもない物を持って来たという事だ。
とんでもない物とは、組立て式の大型コンポジットクロスボー
ある。

「野犬は嫌い！」って言ってたが、あれで撃ったら野犬程度では
貫通するぞ！全く・・・

2人で小さな町並みを抜け、裏山の山道を登って行く。

キノコが近場にあるはずが無い。近場のキノコは老人の楽しみ。

俺達は更に上の山中を目指す。

途中の展望台で休憩を取ると、更に山道を登って行く。

道は次第に細くなり、終には獣道となる。それでも先に進む。軍
用コンパスと地図があれば現状位置の確定は可能だ。この手の訓練
は小学生時代からのオリエンテーリング大会で十分訓練を積んでい
る。

「あつた！」

姉貴が籠を振り回してはしゃいでいる。

見ると、大きな山栗の木がある。下には沢山のイガグリが落ちて
いた。

早速、イガグリをブーツで器用に剥きながら山栗をゲットする。数十個拾ったところで、再び獣道を進む。そして、日当たりの良い斜面で本命のキノコを取ることにした。

キノコは日当たりが良い場所には生えない。そんな場所の何時も木の陰になっているような場所に生えてくるのだ。

10個程取ったところで、姉貴の籠を覗く。沢山あるのだが・・・毒キノコが殆どだ。丁寧に鑑別して毒キノコを除いたところに俺が取ってきたキノコを入れる。

時計を見ると、昼を過ぎている。

姉貴が作った大きなオニギリを木陰で並んで食べる。

そして、さあ帰ろうかという時に、異変に気がついた。

太陽が雲に隠れ、山の下の方から霧がかかって来た。

急いで荷物を担いで山を下りる。しかし、道は獣道・・・何時しか異なる方角に進んでいることに気がついた。

昨夜の天気予報では今日は晴れのはずだ。朝からの日差しが原因であれば、さほど時をかけずに霧は晴れるはず。風が出れば更に早まる。

歩き続けて少し開けた場所を見つけたので、此处で休むことにする。

帰りが遅くなっても、姉貴と一緒にならば両親は心配しない。姉貴の家でもそうだ。ここは、動かずに霧が晴れるのを待つのが得策と考える。

霧は、時を経ても晴れる様子が無い。かえって濃密さが増している。

小さな焚き火を作ると、姉貴が簡単な夕食を作りはじめた。

姉貴は実の姉ではない。隣に住む矢上家の娘だ。俺と1歳程上になるが、俺が生まれた時から世話になったようだ。

俺の発した初めての言葉が「オネータン」だったらしい。ある意味、姉貴のオモチャ同然ではあったようだが、俺が歩き始めると常に付きまとい、面倒を見てくれたらしい。

矢上家は姉貴とお爺さんの2人暮らしで、お爺さんは合気道の道場を自宅で開いている。物心が付くか否かの頃から、姉貴と稽古をしていたようだ。

中学生になると直ぐに黒袴の資格を得て、今は年少組の指導までするようになった。

姉貴はさらに上を行って、中学生の指導をしている。さすがに、高校生以上の組については師範が指導しているが、このまま稽古を続けると卒業と同時に師範の資格を得ることが出来そうだ。

道場では、亜流ではあるが杖術として、4尺の杖を使った攻撃方法がある。これも、半ば強制的にお爺ちゃんに仕込まれた。

姉貴は高校生になると、合気道部ではなくバイトに勤しんだ。俺が高校に入ると半ば強引に付き合わされた。コンビニのバイトである。

バイトの給料は、全て変な装備に費やされた。日本の法規制を全く無視した調達網を姉貴は知っているらしい・・・道場に通っている変な外人にコネがあるみたいだ。

おかげで、海外の特殊部隊装備品が手に入ったが、こんな日本ですでどうするの？っていうような物ばかり・・・刃渡り40cmのグールナイフなんて押入れに入れとくしかないが、今日は、ザックに収まっている。

こんな、怪しい2人だが、町の警察官には結構受けがいい。それは、コンビニのバイトで強盗を2件撃退しているからだ。しかし2件とも警察以外に救急車が必要となった。

最初の強盗は、姉貴が投げ飛ばした先にあるガラスドアを破ってガラスによる腹部裂傷・もう少して失血死だったらしい。

2度目は、俺の床モップによる攻撃で、鎖骨損傷、肋骨骨折となった次第である。

両方とも、正当防衛で処理されたが、やり過ぎないように嚴重注意を受けた上で、感謝状を頂いた。

今朝も、この格好で巡回の警察官と会ったが、姉貴の「キノコ取りに行くの！」に「気を付けて行けよ。野犬に注意してな！」という事で、済んでいる。

しかし、この霧は異常だ。夜になりさらに濃密さが増している。小さな焚き火に照らされた数mの空間のみが存在しているようにも感じる。

肩に重みを感じる。どうやら姉貴はエマージェンシーシートに包まって眠り込んだらしい。いつの間にか、姉貴を小さく感じるようになったが、それでも姉貴は170cmはある。俺が、180cm迄背が伸びたからなのか・・・

ガサ・ガサ・ガサ・・・と何かが近づく音がする。

殺気は感じないが用心の為に、杖を直ぐ脇に寄せた。

茂みからガサリという音と共に現れたのは、小さな老人の姿をしていた。

しかし、老人が身に纏っているのは、着古した着物のようなものである。古木の杖について焚き火に近づくと、俺の対面の地べたに座る。

ジツとしている姿は苔生した石仏のようだ。

害がなさそうなのでほっておくことにした。触らぬ神に祟りは無

いつて言うじ。

「我を敬う者の子孫たる娘の願いを聞くことにした。．．お前の意思は知らねど、同行させる。お前達に与えるものは3つ、老いと病を防ぎ、言葉の理解、それに若干の体力向上．．娘の願い通り慎ましく生きよ．．」

一方的に話を終えると、立ち上がり霧の中に消えていく。
白昼夢？にしては、現実的だ。現に、老人の座った場所は草が倒れている。

ということとは、この霧は先ほどの老人の仕業とも考えられる。
俺達を迷わせ、此処へ導き、引導を渡す．．．ってことか。
ともあれ、明けない夜はない。明日にはこの霧も晴れるだろう。

霧が晴れて

どうやら朝になったようだ。

霧の明るさが増してきたが、見通しの悪さは、昨日のとおり周囲数m程度の見通し距離だ。

昨夜の怪異は幻だったのだろうか・・時間が経てば経つほどに、現実味が無くなってきている。

「おはよう！」

姉貴の能天気な声が、静寂の中ではやけに大きく聞こえる。

「おはよう。姉さん・・未だ霧が晴れないからしばらくは動けないよ。」

「そうだね。」って言いながら、ザックの中をぐそぐそと漁っている。

やがて、昨日のオニギリの残りを取出して、焚き火の隅に放り込んだ。俺のザックからはトレッキング用の鍋を取出し水筒の水を入れて熾火にかける。

そんな姉貴を見ながら、昨夜の老人の話をしていると、突然姉貴は俺に振り返った。

「少しその話は当ってるかも・・矢上家の古い名前はヤマガミと言うのよ。・・（この辺の山岳信仰を一体化した山神の神官だった）と、お爺ちゃんが言ってたのを覚えてるわ。」

姉貴はそう言いながら焚き火から、オニギリを取出し、ホイルを剥くと鍋に放り込んで、お味噌をニューッとチューブから取出すと鍋に入れてかき回している。

少しづつ霧が薄らいできた。もう、周囲10m以上は確認できる。回りを見る内に、小さな苔生した祠を見つけた。

何となく、昨夜の老人の姿にも見える。そういえば、老人の消えた方向は祠の方向と同じだ。

「はい！」って姉貴が、雑炊モドキをカップに入れて渡してくれる。

薄ら寒い状態で食べる熱い雑炊はとりあえず体を温めてくれる。

「アキト・・・食べながらで良いから、聞いてくれる？」

俺は、先割れスプーンを口に入れながら頷いた。

「昨夜ね、変な夢を見たの・・・変よね。私は寝ていなかったもの。」

いや、十分にお休みでした。と姉貴には言えないのが辛い。

「老人が・・・ぼろぼろの着物みたいなものを着た小さな老人が出てきて、言ったのよ・・・望みを叶えてあげる。って、それじゃあって事で、老いず、病にかからず、どんな言葉も理解できるようにって、言っただけど・・・どうやって確かめたらいいと思う？」

ちよつと待て、今の話ってさっき俺が話したこととリンクしてるじゃないか・・・待てよ・・・もっと重要なことがあったような・・・そうだ、「同行させる」だ。これってどこかに誰かと行くという時に使う言葉だぞ。

「・・・あの・・・姉さん・・・ひょつとして（どこかに行きたい。）って考えたことあるの？」

「あら！・・・良く知ってるわね。・・・偶に思うのよ。（自分達の

力だけで暮らしてみたい。」ってね。」

何気に2人称であることが気にはなったが、ここはスルーしよう。朝日のせいかわ霧が更に晴れていく、もう100m程度先まで見通せる状態にまで回復した。

焚き火を頼りに野宿した場所は、20m程の小さな広場だった。先ほどの祠を祭った址なのだろう。踏み固められているためか木々がこの場所には生えないようだ。

周辺の木々は緑に覆われ・・・？

ちよつと待て！・・・今は秋だぞ！

・・・確かに生い茂っている。季節的には初夏の様相だ。

俺達が来た獣道を探すが何処にも見当たらない。いくら獣道と言っても痕跡すら無くなるはずはない。

懸命に探す、広場の周囲にはやはり痕跡は無かった。

霧は薄れてはいるが未だ遠くの山並みまでは見えてこない。現在位置を特定して、下山する方角を探すとするか。

ようやく、遠くの山並みが薄く霧を通して見えるようになった。しかし・・・ここは何処だ？

全く見覚えの無い山並みが聳えている。一番高い山は富士山のようにも見える。

「如何したの。アキト？」

呆然と立ち尽くす俺を見上げて、姉貴が訝しげに声をかけた。

「俺達の裏山じゃない！」

俺の声に、姉貴も立ち上がると周辺の山並みを見る。

「・・・何処だろね？」

実に気の抜ける問いではあるが、2人とも見覚えの無い場所だとすれば、此処は何処なのだろう。

「ギョエー・・・」

おかしな声で鳴く鳥が俺達の上を飛んでいく。
雉のように見えなくもないが・・・雉はあんなに空高く飛び回ることは無い。

「アキト・・・ひょっとして、だけど・・・此処は、私達と違う世界かも・・・」

それは、俺も考えていた・・・しかし、それを言ったら姉貴が不安になるかもと、言えない言葉ではあったが・・・姉貴もそう考えるなら、此処は、間違いなく異世界ってことになる。

ガサガサ・・・と音がして向かい側の藪からちいさな動物が姿を現した。

しきりに小さな頭を動かすと俺達に気付いたのか、藪の中に飛び込んでいった。

「見た!」

姉貴は、驚いた顔で俺を見る。

さっきの動物は、よく見る野うさぎのようだったが、長い耳の変わりに角が頭の両側から生えていたのだ。ウサギとは違う動物かもしれないが、角の長さで生えてる位置がウサギの耳のように見えた・・・

「見た!・・・でも、見たこと無い・・・」

あんなのがいたら、パンダ以上の珍種だ。しかも俺の町の裏山にいるなんて聞いたことも無い。

やはり、姉貴の言うように・・・此処は異世界。・・・そして、俺は

姉貴の望みのままに異世界に同行してしまった・・・ということになるのだろうか。

姉貴がザックの中からクロスボーを取出して組立て始める。

肩当のついた台座の左右にカーボン繊維で作られた弓を取付け、先端の滑車に弦を張っていく。

シオルダーバックのような矢筒を首から肩に通して持つと、最後にバックの中から、短刀を取出してベルトに差す。

「ほらほら・・・アキトも準備をする！」

姉貴の行動をあっけに取られて見ていたが、その声で我に返った。ザックの中からグルカナ이프を取出し、ジーンズのベルトを緩めてナイフケースを腰の後ろになるようにベルトにしっかりと取付けた。

姉貴を見ると、山菜鎌の鎌を取外して、クナイを柄の先端に取付けている。

ホントに何処まで武器マニアなんだか・・・

「最後はこれね！」

姉貴がザックの中から包みを2つ取出す。

そして大きいほうの包みを俺に差出した。

大きめの赤いバンダナに包まれた物はずしりとした重量がある。バンダナを解いて、現れた物は・・・

「美月姉さん・・・これは、何処で手に入れたのでしょうか？」

現れた物は拳銃だった。しかも、M29の改造品・・・

俗に熊でも一発で倒せるって言う、マグナム44リボルバーだ。

しかも、バレルは7インチ・ガン・スミス特注品と見た。

「バイト、3ヶ月分よ。凄いでしょ。私のはこれね。」

そう言つて膝のバンドナを解くと、現れたのはM36の4インチモデル・やはり特注品だ。

「美月姉さん・日本では、これを持てないような気がするんだけど・何処で手に入れたの？」

「アレックさんに頼んだら、簡単に買ってきてくれたわよ。」

あの外人・只者ではないと思っていたが・やはり外交官だったのか。

（南の島で泳ごう！）つて誘われて行つた先がグアム・

安宿宿泊かと思つたら、海軍基地の兵舎に泊めてもらった。

そして、昼はひたすら射撃訓練。夜になってようやく泳ぐことができた。

おかげで、南の島に4日も滞在したのに日焼けせずに帰つて来れた。

それを、昨年から何度となく繰り返していた・

ちよつと、待て・そうすると姉貴は此処に来る前から、この日が来ることを知っていた事になる。

装備が増えた事で全体のバランスを取るために、サスペンダーがついた装備ベルトを取出して武器の取付け位置を変更する。

装備ベルトにM29のホルスターを取付ける。グルカナイフは柄が肩位置に来るようにサスペンダーの肩当後方に固定した。最後に、44マグナム実包が6個づつ入った2つのポーチをホルスターの両側に付ければ、今度こそ準備終了だ。

「姉さん・・ひよつとしてだけど・・此処に来ることが解つてたの？」

姉貴は、ベルトにレスキュー用の大型ポーチを取付けていたが、俺の問いにこちらを見た。

「・・解つてたわ。・・あの老人は今まで、何度も現れた・・どうやら、この世界を去るみたいで、縁者の私の願いをずっと聞いてくれた・・私達だけで家のしがらみも無く暮らしたい・・そしたら、叶えてやろうつて・・」

「・・姉さんだけじゃ不安だし・・しかたないか。」

他人だけど・・生まれたときから一緒に居る姉貴と別れるのは願ひ下げだ。

姉貴に交際を申し込んだ相手には何時も言っている。

「俺を越えたら認めてやる！」

おかげで、姉貴が高校へ入学して以来、毎月のようにヤサ男をボコボコにしている。

今の俺がこうしているのも姉貴のおかげだし・・ある意味、姉を超えた感情も少しはあるような気がしないでもない・・

「アキトならそう言うと思つてたわ。・・じゃあ、出かけましょう！」

姉貴は、もう残り火だけになった焚き火を足で踏み潰すと、ザツクを肩に藪の中へ進んで行く。

俺も、急いでザツクを取上げ姉貴の後について行った。

知らない世界

道の無い山中を歩くのは容易ではない。

見知らぬ山なら尚更だ。

山裾と思われる方向に藪を払いながら進んで行く。

俺の前に道は無い。俺の後ろには道はある。という状態だ。

途中の沢で、小休止を取る。冷たい水で顔を洗うと頭までスツキリする。

残り少なくなった水筒に水を補給して、再び下山を始めた。

急斜面の山肌を何度か下りる内に、傾斜を殆ど感じない場所まで来た。

深い森の中を歩いている感じた。

時折、ギャーっという変な声で鳴く鳥達が頭上を飛び交い、何度か猪のような獣（大きな牙が左右に2本づつはえていた）を遠くに見かけた。

「だいぶ、歩きやすくなったね。」

「うん。・・・でも、この森・・・何処まで続くんだろ？」

「歩いてれば、その内出られるわよ。コンパス見ながら同じ方向に進んでるんだから。」

山や森で遭難する原因の一つに方向を見失うことが上げられる。岩や立木を迂回する内に、方向が判らなくなるのだ。俺達は常に一方向、南に向かって進んでいる。

時計の時刻で昼を知り、岩の上で携帯食料を食べる。
固形燃料でお湯を沸かし、コーヒーを作って姉貴と分けて飲む。

「・・・ご免ね。」

「誤る事なんかないよ。良く俺を選んでくれたって感謝したいくらいだし・・・姉さんとは・・・離れたくないし・・・」

いきなり、俺は姉貴に抱きつかれた・・・しかし、此処は岩の上、此処でそんな風に抱きつかれると・・・物理の法則は正しいもので・・・ドシン！と下の藪に2人とも落っこちてしまった。

「・・・ご免ね！」

赤い顔で、とっさに体を入替えて下敷きになった俺から体を離していく。

とりあえず俺は立上がり、店開きした装備をザックに押込み、森の中をまた歩き出す。

今度は姉貴が先頭だ。

姉貴の長い丈のGシャツの背にはザックとクロスボーが乗っている。

あのザックには、分解したクロスボーと2丁のハンドガンそれに弾薬ポーチが入っていたはずだが、それを取り除いた状態であるのにザックはまだ膨らんでいる・・・謎だ。

森の巨木を避けるように姉貴が先導する。

たまに、手元を見るのは、コンパスで方向の確認をするためだろう。

1時間程度歩いていると、前方が少しづつ開けてきた。

立木も細くなり、間隔も次第にまばらになったが、逆に藪が深まったような気がする。

そして、突然に前方が開けた。
草原に出たのだ。

低い段丘がずっと南に続いている。

東と西の景色も森と草原であり、振りかえれば2000m級の山並みが連なり、その奥には、富士山のようにも見える一際高い山が鎮座している。

人家は確認できない。広い視野の中に畑らしきものも存在せず、煙も見えない・・・

「・・・姉さん・・・何も無いみたいだけど・・・」

「・・・そうでもないみたいよ・・・立木に薪取りした痕跡があるわ。」

姉貴は、いつの間にか取出した小型双眼鏡で広い草原を監視していた。

手渡してくれた双眼鏡で確認すると、確かに鋭利な刃物で枝を切取った跡が見える。

200m程東のその場所に俺達は向かうことにした。

草原の草は見た事が無い草だったが、草丈が20cm程であり、歩くのには余り支障にはならず、数分で問題の立木までたどり着いた。

確かに、誰かが意図的に枝を切取っている。

周囲を見ると、森の中に踏み固められた小道が続いており、所々の立木に薪取りの跡が見える。

「誰かいるみたいね・・・」

姉貴の呟きに俺は首を縦に振る。

異世界の住人・・・俺達と同じような姿なのだろうか・・・それとも、目が3つとか、手の代わりに触手が付いてるとか・・・

「たぶん、私達と同じような姿だと思うよ、ほら！」

姉貴の指差した地面には靴の跡があった。

靴跡は、足の大きさが15cm程であり、30cm程度の間隔で交互に続いている。2足歩行をする者で、靴を文化として持っていることが判る。

でも、この大きさと子供ぐらいじゃないか・・・ガリバー旅行記が頭の中に過ぎる・・・

子供位の背丈が標準なら俺達は十分に巨人だ。

さらに草原を注意深く見ると、東に向かって草が踏まれている場所があった。

森は小道を形成していたが、草原では草の勢いが強く、小道までには至らないみたいだ。

姉貴は先に行きたかったようだが、草原に獣がいなくても限らない。

薪の心配が無い森の傍らで今夜も野宿することにした。

2人並んで焚火を見つめる。

携帯食料をコーヒードリッパーで流し込むと、後は明日まで交代しながら焚火の番をすることになる。

「姉さん。・・・ちょっと、気になることがあるんだけど・・・聞いていい？」

「なあーにかな！」

「姉さんのザック・・・いろんな物を出してもまだ膨らんでるのは

何故かな・・・って？」

「それはね・・・このザックが魔法のザックだからなの！・・・10倍入っても、重さは15分の1・・・いいでしょ。」

「それと、先に言っておくけどアキトの銃とポーチも魔法がかかっているわ。だから壊れることはないわ。弾も1日で6発補充されるし・・・」

「あまり撃てないってことだね。・・・解った。」

だったら、おれのザックもそうしてくれ！と言いたいところだけど我慢するの男の子だって言い聞かされてる。

銃が壊れずに使えることは嬉しい限りだ。1日で撃てる数は最大で18発。しかし次の日は6発になる。M29の威力を考えると大型の獣が対象となる。とりあえず逃げることにすれば、それほど使用する機会は無いだろう。

「はい！」

姉貴が薄い銀色のケースを俺に渡してくれた。

横に小さな突起がある。

突起を押すと、ケースが開き・・・中に5本のタバコが入っていた。

「内緒にしてるみたいだけど・・・知ってるのよ。・・・沢山は入ってないけど、1日にその本数なら許してあげるから。」

ちよつと気まずい思いではあったが、「ありがと！」と返事をし、早速1本を取出して、焚火から枝を取って火を付ける。

ぷかーっとな煙を吐出すのを面白そうに見ていた姉貴は、ザックから小さな袋を取出すとキャンディを1つ口に入れた。

「気分転換を図ってくれるものは必要だねー。」

知らない世界に姉貴と2人で、誰にも会わず2日を過ごしていたことで、確かに少しナーバスになっていたかも知れない。

少し前向きになる必要がありそうだ。

明日は、草原の道らしきものを辿り、人家を見つけよう。薪取りをする以上、火を使う者であるはずだし、切口を見た限りでは金属を加工する技術を持っていることが判る。

原始人ではなく、少しは文明を持った者に合えるかもしれない。そして、俺達を受入れてくれるなら、何の問題もない。

何時の間にか姉貴が寝入っている。

肩に掛かる重みも近頃は気にならない。満天の星空に小さな2つの月が見えている。

どちらも半月だが、寄添うように空に浮かぶ月は俺達2人のようだ。

後、月が30度程移動したら姉貴と交代してもらおう・・・と思い、この世界で2本目になるタバコに火を付けた。

ミアとの出会い

次の朝、草原に残された草の僅かな踏跡を手がかりに東に向かった。

草原の短い草丈のおかげで見通しは良いが、相変わらず人家等は見つからなかった。

突然、先を進んでいた姉貴が立止まると腰を落とし、俺に片手で腰を落とすように合図した。

四つん這いのような姿勢で姉貴に近づくと、双眼鏡を渡され、指先で確認方向を示される。

レンズが捉えたものは・・犬のような獣の数頭の群れであった。しかも、鋭く長い牙を持っている。

種類はかなり違うけれど、サーベルタイガーの犬バージョンって感じた。

「此方が、風下みたいだね。まだ、気付いていない・・」

「大きさは、近所の太郎ぐらいだと思うんだけど・・獰猛みたいよ。」

太郎は近所の老犬だ。確かシェパードの雑種とか聞いたことがある。

今となっては怖くないが、小学生の時は怖くて前を通れずに、姉貴の後に隠れて通っていた。

ここは、触らぬ神に祟り無しの言葉通りに・・ゆっくりと姿勢を低くして進むことにした。

しばらく、四つん這いで進んでいると、草がきれた場所に出る。

道のようだ。

少しづつ立上がり辺りを見渡す。

誰もいないし・・・さっきの犬モドキも姿を消している。

道の北方向は森に続いており、南方向は草原に続いている。

俺達が辿ってきた踏跡も、どうやらこの道から分かれていたようだ。

「こっちだね。」

姉貴は再び草原に向かって歩き出した。

慌てて姉貴の後を追う。

草原を歩くより歩きよい・・・確かにこれは道だ。森を離れないように緩やかなカーブを描いて東に続いており、尾根を一つ迂回するようにも感じられる。

「キャー――！」

突然、かん高い悲鳴が聞こえてきた。

姉貴がその声に反応して駆け出した。

俺も慌てて後に続いて走り出す。

声からすると、小さな女の子のようだが・・・

やがて、森の木立を背にした男が犬モドキの群れに襲われているのが見えた。

姉貴がM36を引き抜き空に向かって撃つ。

パン・・・パン・・・と銃声が響くと、犬モドキの群れがこちらに向かってきた。

「来るわよ・・・準備して！」

姉貴の声に、杖を構える。

グアアーっと叫び声を上げて襲ってきた1匹を杖で横なぎに打ちつける。

バギっと、てごたえを感じたからには肋骨をへし折っていると思う。

次の1匹は脳天に杖を振り下ろして頭蓋骨を叩き割った。

3匹目は遠巻きに唸るだけで襲ってはこない。

姉貴も手製の槍で2匹を殺ったようだ。槍先からまだ血が滴っている。

しばらく睨み合いが続いたが、ガオン！っと1匹が吼えると、群れは草原に走っていった。

俺達は恐る恐る、木の根元に倒れている男のところに進んで行く。

首に手を当て脈を確認する。脈はなく胸の上下もない・

体のあちこちに出血が見られる・失血死か・

おれの仕草を見ている姉貴に首を振る。

始めて見るこの世界の住人だ。

姿形は俺達と変わらない。手の指も5本づつ付いている。

服装は・綿ではなく、麻のような手触りの上下を着ており、皮製の簡単な上着を着ている。靴は・これも手作りらしい皮のブーツを履いていた。

「私達と同じだね・少し安心だわ。」

「でも、文化程度は低そうだよ・服飾はこんなだし・」

持物を探すと鉈のような短い剣と背負籠それに男が振るっていた木の棒が転がっていた。

籠の中には、数種類の草と薪の束が入っている。

どうやら、薬草か何かを採取に来て犬モドキに襲われたらしい。
男の遺体をどうしたものか考えていると、傍の立木から小枝が降
ってきた。

ん？って立木を見上げた時、

「キヤー！」

叫びと同時に茂みに何かが降ってきた。

姉貴が槍を構えて恐る恐る茂みに近づいていく。

「アキト！・・・見て、見て・・・かわいいよ！！」

姉貴が茂みから目を離さずに片手でおいでおいでをしている。
なに？ってな感じで、茂みに近づき覗き込むと・・・

女の子だった。10歳前後の女の子だが・・・
頭の髪の毛からピヨコンって耳が・・・ネコ？
ワンピースみたいな簡単な皮服のお尻からは50cm程度の尻尾
が生えている。

小学生ぐらいの背丈だけど、肌は俺達と同じだが髪の毛が青みを
帯びた白だし、耳と尻尾は白色の短毛で覆われている。

木から落ちたショックで目を回してるみたいだけど・・・
姉貴がギューって抱きしめてるから・・・呼吸困難になってるみた
いだ。

顔色がだんだんと青ざめてる。

「姉さん・・・離さないと死んじゃうかも・・・」

俺の声に、ハッ！と気が着いたみたいで、膝に寝かせたが・・・尻
尾をナデナデしている。

俺は、女の子の体を触りながら負傷の程度を確認する。

特に、骨折等はしておらず、木から落ちたときの衝撃で一時的に気を失っただけらしい。

女の子が姉貴の膝で動き始めた。

「ムウウン・・・ハッ!・・・痛ッ!」

目をパチツって開くと、素早く身を起こそうとしたが、どうやら痛みのせいでそのまま横になる。

「・・・もう一人は亡くなったけど・・・襲ってた獣はいなくなっ
たわ・・・もう大丈夫!」

「・・・ところで、貴方は誰?」

姉貴が女の子の背中を撫でながら言うと、

「・・・ミア・・・そうニヤの・・・ご主人様は・・・死んだの・・・」

淡々とした答えだった。

どうやら、女の子は奴隷だったようだ。

主人に命じられて野山の薬草を採取していたが、今日に限って高額で取引される薬草が森で豊作だと聞き、一緒についてきたらしい。主人を失った奴隷がどうなるかは解らないとのことなので、彼女が住む村についていくことにした。

さつさとミアは蔓で編んだ籠の中に、男の持物を入れると近くの犬モドキをジッと見つめている。

犬モドキを指差して俺に聞いてきた。

「・・・ガトル要らニヤイの？」

「・・・要らない。食べられるとも思えないし・・・」

どうやら、犬モドキはガトルというらしい・・・

すると、ミーマは籠から短剣を取出すと、短剣でガトルの犬歯を取出した。

右の犬歯を取出すと、次のガトルにかかる。

俺もグルカナイフを握って残り2匹の犬歯を取ってミーマに渡した。

「ありがと・・・これ、交換できるの。」

ミーマは無造作に籠にポイって入れると、その籠を担ぐ。

「行こう・・・」

姉貴がミーマの手を握って一緒に歩き始める。俺もその後を追った。

山裾の集落

森伝いに尾根を1つ回ると、遠くに集落が見えてきた。どうやらあれがミリアの暮らす村みたいだ。

見えても、つくまでの道のりは遠い、途中で軽く食事を取る。

始めて見る携帯食料にミリアは興味津々・おいしいって言いながら俺の分まで食べてしまった。

そんなことで、集落についたときには、だいぶ日も傾き始めたころだった。

集落は、簡単なログハウス風の掘っ立て小屋が10軒程度集まって、その周囲を簡単な柵で取り囲んでいる。

踏み固められた小道は、集落の柵の切れ目に続いており、そこには門番らしき人が槍を持って立っていた。

俺達が門番の傍まで行くと、門番は槍を俺達に突き出した。

「止め！ミリアは良いとして、お前らは？・・それより、サミエルは一緒じゃないのか？」

「ご主人様は死んだ。ガトルの群れに襲われた。この人達がガトルを追い払ったけど間に合わなかった。」

「そうか、草原のガトルは脅威だからな。お前は直ぐに木に登れども、あいつはそうはいかんか。だから、今朝も止めたのに。すると、こちらはハンターなのか、ミリアを助けてくれて感謝する。何もないところだが、ゆっくりしてってくれ。」

門番は勝手に判断して俺達を集落に入れてくれた。

ミリアの後について集落の中を歩くと、少し大きめの家があった。どうやら長老の家らしい。

姉貴が丸太を半割りにしたような板で作られた扉を開ける。

「あのう・・・誰か居ませんか？」

「誰じゃ。」

部屋の奥まった所に布を下げて部屋を作ったようなところから、かなりのお年寄りが顔を出した。

「貴方が、この村の長老ですか？」

「いかにも、そうじゃ。はて？・・・お前さん達に会つのは初めてじゃな。なんぞ理由でもあるのかの？」

姉貴は、ガトルの一件を話し始めた。

サミエルの死には、少し驚いたようだが、ミアの今後について話始めると、何故ここを尋ねたか合点がいったようだ。

「まず、ミアは奴隷ではない。サミエルが何処から連れて来たが、奴隷の証である額の刺青はないし、消した後もない。衣食住を保障するとか言いおって奴隷のように働かせておったが、あまり融通は利かなかったの・・・村人からの噂も良いことは聞けなかった。昨日の旅人から森で高額な薬草を沢山見たと聞いて出かけおったのじゃな・・・欲に正直な男だった。」

「すると、ミアは？」

「自由じゃよ。この村に暮らすもよし、村を出てもよし。出来るなら、これも縁と思って面倒を見て欲しいがな・・・」

「でも、私達兄弟は、生活手段がありません。仕事のあてがあるといいのですが。」

姉貴が少し困った顔を見せて言った。

長老はその言葉に驚いたようだ。

「何と、ガトルを倒せる者が！・・・それなら、ハンターとなるが
良いじやろう。この村では出来ぬが下の村は大きい、ハンター・ギ
ルドがあるはずじゃ。今夜はこの村に泊り、明日出かけるがよかる
う。」

丁寧に姉貴は長老に礼を言つと、俺達は家を出た。

こっちこっちと姉貴の手を引くミーアと連れ立って小さな家に
入る。

どうやら、ミーア達が住んでいる家ようだ。家主はもういない
けど・・・

家の中は狭く、10畳位の真ん中に石で囲っただけの炉があるの
で、傍の薪で早速火を点ける。

パチパチと燃え上がる火で部屋の中がよく見えるようになった。

端にベッドと木箱。その反対側に藁が敷いてある。

炉の反対側には木桶と古びた鍋。そして数個の木の椀・・・其れだ
けだった。

「ミーアちゃんは何処で寝てたの？」

姉貴がミーアを覗き込むように尋ねると、端の藁を指差す。

どうやら、藁に包まって寝てたらしい。姉貴はため息をつくと、
ベッドの脇の木箱を開けた。

中には・・・酒瓶と男物の粗末な衣類、それに小さな皮袋があつた。
皮袋を開けると、1枚の銀貨と大ききの異なる10枚程度の銅貨
が出てきた。

あの男の蓄えらしい・・・とすると、これはミーアのものだ。

「待ってて・・・ちよつと出かけてくる。」

そう言つと、籠を背にミーアが家を出て行つた。

「貧乏なのか、幼児虐待なのかよく解らないけど、このままではいけないわ。私達で引き取るけど良いわね？」

「ああ、一人暮らしはかわいそうだ。でも、俺達だって此処で暮らしていけるか解らないよ！」

「その点は大丈夫。長老が言ってたでしょ。ハンターになれって明日、下の村に行きましょう。」

そんな会話をしながら、姉貴は自分のザックの中をぐそぐそと何かを探し始めた。

取出したのは裁縫セット・何でも持って来てるような気がする。そして、木箱の中にあつた男物の衣服を切り裂いて何かを作り始める。

暇になつた俺は、ザックからポットを取出し、水筒の水を入れて炉の脇に置いた。これでコーヒーが飲める。

「ただいま・・・」

ミアアが帰ってきた。

姉貴が（お帰り！）って返事をする。

姉貴の所にトコトコと歩いていくと（はい！）って右手を出す。

姉貴は怪訝な顔をして右手を出すと、銀貨1枚と大小の銅貨数枚がその手にのつた。

「如何したの・・・これ？」

「さっきの牙と薬草を売ってきたの。」

「このお金つてどれ位の価値があるの？」

「銅貨10枚でご飯が食べられるってご主人様が言ってた・・・銀貨は銅貨100枚分、そしてこの大きなほうは銅貨10枚分だよ。」

どうやら、貨幣単位は10進法らしい。10倍毎に異なる貨幣があるみたいだ。

銅貨10枚でご飯が食べられるということは、だいたい1枚が10円程度になるのかな。

ザックからアルファ米を取出してお湯が煮立った鍋に入れる。乾し肉と乾燥野菜をいれて塩で味を調整・簡単だけど、雑炊の出来上がり！

お椀にすくうと、3人でおいしく頂いた。

夕食が終わると、3人でこれからの事をもう一度確認することにした。

まず、これからの暮らしを如何するかだ。

長老は、ガトルを倒せるなら下の村に行つて、ハンターになればいいって言っていた。ガルドの牙はミリアの話だと、銅貨25枚程度で売却できるらしい・・・という事は、

1日で、ガルドを4匹仕留めれば食事は出来るということだ。

寝る場所については、最初は野宿・不安はあるがガルド程度なら心配ない。

後は、ギルドでの依頼にどのようなものがあるかということだが、別に上を望む訳ではないので、暮らせる分に留めればそれも問題は無いだろう。姉貴を見ると、膝にミリアを寝かしつけて針仕事をしている。

「姉さん。何を作ってるの？」

「この子ねえ・・・下着すらないのよ。とりあえず上着は今の皮服でいいとして、下に着るシャツとパンツを作ってるの。出来れば、アキトには靴を作ってほしいけど・・・無理かなあ。」

「ウウン。とりあえず作ってみるけど、期待しないでね。」

早速、ザックからノートを取り出し、ページを1枚を破る。

鉛筆を持って、寝ているミリアの足から靴？を脱がせると、足の裏に紙を合わせて鉛筆でなぞり足の型紙を作った。

次に木箱を漁ると、鹿皮のような上着を見つけた。痛んではいたが、着る訳ではない。

木箱の蓋を利用して型紙より少し大きめに靴底を4枚切取る。

次に、靴の表だが・・自分の靴の構造を見ながらおおよその形で同じ形になるように2枚切取った。

「姉さん。クナイ貸してくれる？」

俺の注文に、姉貴は靴のケースに差してあるクナイをほんと投げてくれた。

クナイを使って皮ひもを4本切取る。

靴底2枚と靴の表の下側を丁寧にクナイで穴開けを行う。そして、両者を皮ひもで縫い合わせると、簡単なモカシンブーツだ。履いた後で靴の表に開けた調節用の紐を閉じれば出来上がり。我ながらよく出来た。

ほら！って姉貴に見せようとしたが、既に姉貴は夢の中。

火の番のついでに、バックも作ってみる。これは、1枚の皮を3分の1程折って両側とベルトを通す場所を、穴開けの後に紐で閉じていけばいいので簡単だ。

時計を見ると12時を回っている。

炉に薪を放り込み、俺も寝ることにした。

ハンターになるために

次の朝、コーヒーの香りで目が覚めた。

コーヒーを入れたシェラカップを（はい！）って姉貴から渡される。

苦い味が、ぼんやりとしていた俺の頭を覚醒させる。

俺が寝ている内に、出かける準備は終わったようだ。

ミーマは昨日と違って、足首までのパンツと長袖のシャツを薄い皮のワンピースの下に着ている。昨夜、姉貴が縫っていた成果だと思う。

足に履いているモカシンモドキは、俺が作ったものだ。とりあえず作ったものにしては、我ながらよく出来ていると思う。

腰には、紐をつけたバックを肩から提げている。あまり出来はよくないが、物を入れるには問題ないはずだ。

そして、背には・サミエルが持っていた短剣を背負っている。

ジッと思っていた俺に気付いたミーマは、

「ありがとう。お兄ちゃん。」

と言つて、姉貴の後ろに隠れた。

ずつと、年下の兄弟が欲しかったが此処に来てようやく適ったわけだ。

嬉しくなっと思わず、ミーマの頭をガシガシって撫でたら、姉貴に山菜鎌の柄でポコンって叩かれた。

「虐めちゃだめでしょ！」

メッ！って顔をしている。

触らぬ・何とかで、こんな時は話題を変えるに限る。

「もう、出かけるの？」

「そうよ。丸1日掛かるみたいだから、急いで準備してね。」

準備と言っても・・特にない。

昨夜借りたクナイを姉貴に返しておく。ザックを担ぎ、山菜鎌を持てば準備完了だ。

携帯食料をコーヒーで流し込むと、ポットの残り湯を炉に注いで火を消す。

家を出て、先ずは長老の家に行く。

まだ、日も出ていない早朝だが、長老は家の前に佇んでいた。

「出かけるんかいの。この時間に発てば、夕暮れには着くはずじゃ。南の道を真っ直ぐに行くんじゃぞ。・・それと、ミアをよろしくな・・・」

「はい。では行ってきます。」

姉貴はそう言って、集落の南に向いた道を歩き出した。

出口の柵にはまだ番人もいなかったが、柵をずらして出た後は柵を基に戻しておいた。

道と言っても、丁度荷車が通れる程度の踏み固めた道だ。

周りは畑が広がっており、名前の知らない野菜類が育っている。

そんな畑の中をウネリながら緩やかな下り道が続いていた。

姉貴はミアと手をつなぎながら俺の前を歩いている。ミアの長い尻尾が歩いた際に左右に振れるのが、何となくかわいらしい。気が着くと、揺れる尻尾に合わせて何時しかハミングしていた。

「ご機嫌ね！・・・この先の草原は、ガトルがたまに出るらしいから、気を付けてね。」

「ああ大丈夫。後ろは任せて・・・」

俺のハミングに気が付いたのか、姉貴が振り返って注意してくれた。

改めて周囲を見渡すと、道の傾斜に合わせた段々畑の造りが進むにつれて雑になってきている。村の傍と比べると歴然としている。

村から、南に向かって少しづつ畑を切り開いてきたような感じだ。

道の途中に大きな岩があった。数本の立木も生えている。

岩の傍には焚火の跡があることから、長老の言っていた村への休憩所として利用されていたようだ。

時刻も丁度昼近く。ずいぶん歩いてきたようだが、下り坂のせいかそんなに疲れてはいない。

姉貴の（食事にしよう！）の一言で、この岩で休憩になった。

枯枝を集めて、焚火の跡を利用して火を焚いた。

ザックを探して、食料がないことを姉貴に告げると、ザックから紙包みを取り出して渡してくれた。

中には、アルファ米とチューブ入りの味噌汁の素、それにビーフジャーキーみたいな乾燥肉だ。3人で食べても2日程は持つ量だけど・・・あのザックの機能から、これだけでは無いと思う。

不思議そうに姉貴の顔を見ると、

「今は、これだけね。1月分位の食料は持ち込んできたけど、これから何があるか分からないから、少しは節約しないと・・・」

言い聞かせられてしまった。

確かに、そうだけど、たまには腹いっぱい肉を食べたーーーーい。

そんな中、「あれ！」ってミアが持っていた先割れスプーンで草原を指した。もう一方の手にはシェラカップがあったのでスプーンを使ってみたんだ。

「何？」って姉貴は小型双眼鏡でミアの指した方を見ていたが、「アキト。肉が走ってくるわ。準備して！」

ようやく、俺にも様子が見えてきた。

猪モドキの小さいのが数匹のガトルに追われている。

姉貴がクロスボーを準備していると、猪モドキを殺るつもりみたいだ。となれば、俺はガトルを退治して猪モドキを我が物にするのが役目。

猪モドキが岩の傍を横切ると同時に山菜鎌を振り上げて追いかけてきたガトルに飛び掛った。

着地と同時に1匹の背中を叩いて撲殺し、身を起こしながら手近かなガトルを鎌に引っ掛けて投げ飛ばした。

動きを止めると飛び掛って来るのは犬の習性なので、走りながら次の獲物の頭を殴る。さらに、吼えているガトルを横殴りに首筋を払って首を折ってやった。

辺りを見渡して、他にガトルがないことを確認する。

ふうつと息を吐いていると、ミアが岩から下りてきて猪モドキの走っていった方へ走り出した。姉貴も後が続いている。

確か、右の牙だったよな。自分に確認しながらガトルの牙を頂戴する。貴重な換金部位だ。

姉貴の方に歩いていくと、猪モドキの血抜きをしている最中だっ

た。

臓物を抜き、首と足の静脈を切って立木に吊るしている。

「いい所に来たね。あの枝を切って簡単な櫓を作って欲しいんだけど・・・」

「いいよ。ちょっと待っててね。」

姉貴の指差した木の枝をグルカナイフで叩き切り、Yの字になるように余分な枝を切取る。

そして、血抜きが済んだ猪モドキを櫓に縛りつける。こうすれば、2本の枝が櫓になり長手の枝を持って引き摺って行く事ができる。

猪モドキをよく見ると、額に小さな角が一角獣のように出ている。ミリアが短剣でガンガン叩くと基からポキンって取れた。

大事にバツクに仕舞ったことから、猪モドキの換金部位は角だったんだと気が付いた。

それから焼く時間後、俺は平原の下り坂をズルズルと猪モドキを引き摺って歩いている。

先に行く2人は軽快に、何を話しているのか時々笑い合いながら歩いているが、今の俺はそんな気楽さは微塵もない。

たまに、遠くから俺を見るガトルがいるからだ。せつかく手に入れた肉を奴らに奪われないように、最大限の警戒を取りながら歩いている。

だいぶ日が傾いてきた頃、ようやく遠くに村が見えてきた。

ミリアの村とは、断然大きさが違う。百軒を越えると思われる村の家々は、丈夫そうな丸太の柵で全体が囲われており、門すらも見える。どうやらこの道は、あの門に続いているらしい。

近づくにつれ、大きさが実感できる。

門も上部に櫓が付けられている。丸太を裂いたような雑な板で作られた両開きの扉は、片方だけでも荷馬車が通れる程の横幅だ。皮鎧を葺つい顔の男が、2m程の槍を持って、門番をしている。

ズルズルと猪モドキを引き摺って門をくぐろうとした俺達の前にいきなり門番が立ち塞がった。

「待て、見かけん奴だな・・何処から来た？」

「上の村から来ました。長老がガルトを倒せるぐらいなら、下の村へ行ってハンターに成れって。」

姉貴が丁寧に答える。

「上の村・・ああ、あの集落か。確かにここにはギルドがある。

イネガルの子供を途中で手に入れるぐらいなら、立派にハンターになれるぞ。よし、通れ！」

門番はそう言って道を開けてくれた。

「ありがとうございます。ついでに聞いて良いですか？・・ギルドの場所と、このイネガルですか、これを買ってくれる所を教えてください。」

「ギルドは、此処を真っ直ぐ言った先の十字路にある。盾の看板が目印だ。肉屋は途中の左側にある。骨付き肉の看板だから直ぐに判るはずだ。」

「「ありがとうございます」」

門番に礼を言って早速肉屋にイネガルという猪モドキを売りに行く。

なるほど・・骨付き肉が看板だ。

肉屋で銀貨1枚でイネガルを売る。但し、後ろ足1本分はその場でこちらの取り分とした。それでも、皮と肉で結構な儲けを肉屋は

期待できるみたいだ。

村のギルド

イネガルの後ろ足を粗雑な紙で包んだ荷物を担いでいると、何か獲物が小さくなったようで、ちよつとがっかりした気分になった。た。

でも、これなら直ぐにでも調理することができると思うと、そんな気分も吹き飛んでしまう。何しろ、久しぶりの肉だ・・肉だよ・・お肉様なのだ。

後ろでそんなことを考えているとは知らない2人は門番に教えてもらった十字路で盾の看板を探し始めた。

「あ!・・あれだね。」

姉貴達が十字路を斜め横断して大きな建物に入っていく。

入口らしき所で俺を手招きしているから遅れると煩いので、急いで姉貴の所に向かった。

2階建ての大きな建物がギルドだった。木造ではあるが、俺の家より遥かにでかい。

入口の両開きの扉を開けて中に入ると、正面にカウンターがあり何人かのお姉さんがいる。ちよつと銀行にも似ている気がしないでもない。

カウンターの真ん中にいるお姉さんに狙いを定めて歩き出す。

「あのう、此处でハンターになれると上の村の長老に聞いたんですが・・」

姉貴が恐る恐る用件をきりだした。

「はい! 成れますよ。・・成りますか?」

「成ります!」

「え〜つと・・・新規登録ですね。それでは、この用紙に必要事項を記入して下さい!」

何か、軽いノリのお姉さんだが、どうやらハンター登録が出来るらしい。

姉貴に渡された用紙を後ろから覗いて見ると・・・読めない。

ギリシア文字とクサビ形文字が融合したような文字が小さく並んでいる。

「何これ? こんな文字見たことないぞ!」

「アキトも読めないの?」

姉貴はミリアに用紙を見せてみたが、ミリアも首を振るだけだった。

「あのう・・・読めないし、書けません。代筆お願いできますか?」

「はい。大丈夫ですよ。・・・此处ではなんですから、奥にどうぞ!」

そう言つてカウンターの端にある扉から、中に案内された。

小さな会議室みたいな部屋で、お姉さんの質問に答える形で俺達のプロフィールが用紙に書き込まれていく。

「お名前は?」

「私がミズキ・ヤガミ。こっちが、アキト。この子はミリア。」

「御出身は?」

「ニホンだけど・・・」

「何処から歩いてきました?」

「上の村から・・・」

「出身は、アクトラスつと!」

「得意な武器はなんですか？」

「私は、弓。アキトが剣かな？ ミーアは・・・」

「あたしは、これでいい。」

「短剣ですね。分かりました。」

「魔法は使えますか？」

「そんなのあるの？」

「魔法は使えないっ！」

「亡くなられた場合の連絡先は？」

「いません。」

「死亡時はギルドに付託っ！」

というような問答で用紙が埋められ、最後にお姉さんは直径5cm程の水晶玉を取り出した。

「個人の技量を計測します。一人ずつ持ってみてください。」

先ずは姉貴が右手で持つ・・・一瞬、ピカって光った。

「はい、いいですよ。では次の方。」

次は俺が持ち、光ったことを確認して、ミーアに渡す。

ミーアが持つ水晶玉が光ると、お姉さんは水晶玉を回収した。

「これで、全て完了です。あとは・・・そうだ！ 皆さん一緒に仕事をするんですね？」

「ええ、そうしたいと思っていますが？」

「それでしたら、チーム名を登録しておくと便利ですよ。チーム

でないと受けられない依頼もありますから。」

「それでしたら・・・【ヨイマチ】にします。」

「はい。分かりました。」

お姉さんは3枚の用紙を書き上げると、改めて俺達を見た。

「次は、ギルド組織の注意事項です。一応簡単に説明します。分からない時や、困った時は、その都度説明しますから、カウンターで尋ねて下さい・・・」

お姉さんが話してくれた注意事項は次のような内容だった。

ギルドのホールにある依頼掲示板で仕事を探すことが出来る。

依頼掲示板に張り出されている用紙にはハンターレベルが記載されており、現在のレベルの1つ上までの依頼を受けることができる。依頼完了の報酬は依頼が完遂されたことを示すものを持参する必要がある。これとは別に獣等の換金部位を持ち帰った時は、その金額が報酬に加算される。

依頼遂行上の負傷等は事故負担。

依頼遂行に係る衣食住は事故負担。

武器、防具等の費用は事故負担。

装備等の一時預かり等である。

「ということは、ここに来る途中で手に入れた、これなんかも換金できます?」

姉貴はそう言って、ミアのバックから、角と牙を取り出した。

「え!・・・出来ますよ。これは預からせて貰います。ホールで待っていて下さい。」

俺達は部屋を出るとホールに移動した。

確かにホール両側に依頼掲示板があり、粗末な紙に書かれた依頼用紙が一面に貼り付けられている。

「読めないのが難点ね。何とかしなくちゃ。」

姉貴が用紙を見ながら呟いた。

確かに、ハンターに成れても依頼書きが読めないのでは話の外だ。

「皆さん。いらして下さい。」

ホールにお姉さんの明るい声が響く。

そろそろカウンターに行くと、お姉さんがカウンター越しに3枚のカードを渡してくれた。

「これが、ミズキさん。これがアクトさん。最後はミアちゃんのです。」

これが、RPG等でお馴染のギルドカードってやつか・

名刺サイズの金属片。読めないから内容は分からないけど、いろんな項目に刻印が押されている。そして、下の部分に穴が2個開いていた。

姉貴のも同じように2個開いている。でも、ミアのは1個だった。

「皆さんのカードは、初心者ですので、赤のカードとなります。」

下の穴は戦闘レベルに相当します。さっきの水晶球で調べたもので、公平な分類ですよ。俗に、赤2つと言われるレベルです。・・それと、換金ですが・・130レクですので、銀貨1枚と銅貨3枚です。

「ありがとうございます。ところで、良い宿がありましたら紹介してください。」

さりげなく、姉貴がお勧めの宿を聞いている。

そして、現在歩いている先がギルドのお姉さんお勧めの宿（フィーネの宿）なんだけど、この距離って村はずれだよ。だいたい歩いてきたぞ！

「此処だと思っただけど・・・今晚は！」

小さな2階建ての家は、ギルドからだいぶ離れたところに立っていた。目印は、家の左に立つ大きな杉の木。

俺達が扉を開けて中に入ると、カウンターのおばさんにジロ！って睨まれた。俺達、お客さんだよな。

「今晚は。あのう、泊めて頂けますか？」

「よく、こんな外れの宿を見つけたねえ。」

「ギルドのお姉さんに紹介して貰いました。」

「サンディの紹介かい。いいよ。泊めたげる。1人20レクだけど何泊だい？」

「余り持ち合わせていないので・・・2泊お願いします。それと、此処で食事はできますか？」

「朝は、1人5レク、夜は8レクで食事を出すよ。」

「3人分お願いします。それと、これを焼いてくれますか？」

俺は、担いできたイネガルの片足をカウンターに置いた。

おばさんはしばらく肉を眺めていたが、

「焼くだけなら、サービスでいいよ。所で余った肉だが・・・」

「差し上げます！」

「いいのかい。すまないね。さて、これが部屋の鍵だ。4人部屋だが問題ないだろ、食事は直ぐに作るからとりあえず部屋に荷物を置いてきな。」

姉貴は銀貨と銅貨を混ぜて支払うと、鍵を受け取った。

おばさんが指差す階段を上ると、通路の両側に部屋がある。

4つある一番奥の部屋が俺達の部屋だ。部屋番号はあるのだが・俺達には読めない。鍵についていた札の記号と同じ記号を探してどうにか部屋を確定できた。

部屋は2段式のベッドが2つと椅子4つのテーブルが1つ。片側の扉を開けると小さな木の風呂桶がある。トイレが無い所を見ると・外にあるのかな？

ベッド脇には木箱があり、簡単な鍵も付いている。とりあえず木箱にザックを入れて、夕食を取る為に下へ降りることにした。

俺達が階段を降りる音に気が付いたのか、

「そのこのテーブルで待つといて。もう直ぐ出来るから。」

カウンターからおばさんが声をかけてくれた。

確かに、カウンターの反対側にテーブルがある。

5セットあるテーブルには2組の先客がいた。どうやら、食堂と宿の兼業をしているらしい。

彼らから離れたテーブルに着いてしばらく待つと、夕食が出てきた。

野菜中心のスープと固めの黒パン。そして、イネガルの焼肉だ。

他の客をチラって覗くと、焼肉無しで同じような献立だ。

「オイ！ 俺達には無えのかよ？」

客の一人が俺達の焼肉を目ざとく見つけて、おばさんに食いついている。

「生憎だねえ。彼女達が仕留めたイネガルの現物持込さ。明日はその肉でシチューを作るから楽しみにしてな」

「くそー、現物持込かよ。俺達にはまだイネガルは無理だぞー！
！」

「しかし、見たところ大分若いようだが、良く仕留められたものだな。」

「大方、横取りしたんじゃないかねえのかい。俺達だって、イネガルは年に何度も仕留められねえ。」

席を立って怒鳴りつけようとした俺を姉貴は服の裾をつかんで押し留めた。

「言わせておけばいいのよ。横取りには違いなし・・・」

2組の先客は、話ている内にだんだんとヒートアップしてきたようだ。ひよっとして酒でも飲んでるのかな？

1人が俺達のテーブルに来るなり、俺に質問を投げかけた。

「実際はどうなんだ。殺ったのか？ それとも横取りか？」

「ガトルに追いかけていた若いイネガルを殺ったのは私です。追いかけていたガトルを始末したのは、こっちのアキトです・・・確かに横取りですね・・・」

それを聞いた先客達も驚いている。

「ガトルに追われたイネガルの速さは伊達じゃねえ。それに、獲物を横取りされたガトルの執念深さはよく知っている。おめえらよくもまあ、無事だったものだ。ところで、おめえらのハンターレベルは幾つなんだ？」

「さつき、ハンターになったばかりです。」

姉貴はそう言って、ポケットからギルドカードをテーブルに置いた。

「赤2つ・・いいか。今回はうまく行った。だが次もうまく行くとは限らねえ。身の丈にあった仕事を探すんだ。・・いいな!」

先客達も頷いている。

乱暴者のように見えた先客達も同じハンターのようにだ。俺達を心配してくれているようで少し嬉しかった。

最初の依頼はキノコ狩り

食事の後、俺達の部屋に戻ったら、姉貴がザックをこそごと何かを探している。

そして取り出したのは、海兵隊仕様の上下の迷彩服だ。更に、1本の刀まで出してきた。

「明日からこれにしないさい。それと季節が違ふようだから上着は要らないかも・ポンチョを持っていけば大丈夫ね。」

姉貴に従って、服を脱ぎTシャツ1枚になる。迷彩のパンツにベルトを通してはくと、肩パット付きのサスペンダーの背中に取り付けたグルカナイフのケースと交差するように斜めに日本刀を取り付ける。

「姉さん・これって、忍者刀?」

「そうよ。欲しがってたでしょ。お爺さんの部屋にあったから入れてきちゃった。」

テへって舌を出して言わないでください。

確かに欲しかった品だ。反りのある日本刀と違い、反りが殆ど無い・・どちらかと言うと直刀に近いが、実戦では斬るより突く方が効果的だ。しかも、鞘は薄金造り・・木に鋼を巻きつけ漆で塗装している。さらに石突は金属製で先端を研いでいる。鞘も武器として利用できるのだ。

黒塗りの柄を手にとって抜いてみる・・刀身も漆黑、刀身は約70cm十分な得物だ。

取り出しやすいように、四角い鍔が肩から少し出るようにしておく。

小袋に携帯食料と食器等を入れて、ポンチョに巻き込む。それを

サスペンダーの腰部についている専用ベルトで横に固定する。こうすれば、M29がきれいに隠れて見えなくなる。

GI水筒は右腰に着け、GIブーツを履きなおして、迷彩柄のキヤップを被れば・・・何処の戦場に行くのかと思いたくなるような出で立ちだ。

そして、姉貴が最後に渡してくれたものは指先が空いた皮手袋、それに・・・

「姉さん。これは無いでしょ。幾らなんでも・・・これは！」

「何が有るか分からないでしょ。用心の為よ。持ってたなさい！」

驚くなかれパイナップル型の手榴弾だ。

とりあえずサスペンダーの右胸のスリングに通して、マジックテープでしっかりと抑えておく。

俺の方が一段落したところで、姉貴の装備を見てみると、服装が迷彩柄になった位でそれほど変化は無いようだ。

しかし、上着を脱いでTシャツにサスペンダーは、姉貴の大きな胸が更に強調される。あまり見ないようにしよう・・・

ミィアちゃんの方も、変化が無い。違いは姉貴が出したベルトを切詰めてワンピースの腰に俺の作ったバックを取り付け、ポンチョ代わりに俺の上着を丸めて横付けしたぐらいだ。

「さて、準備は出来たわね。明日ギルドに出かけてハンター業を開始します。・・・ザックは必要なもの意外はギルドに預けるから、最後によく装備を確認してね。」

何時の間にか沸いていた木風呂に入り、久しぶりにベッドで眠る。

ベッドで寝るのが久しぶりなせいか、夢も見ずに夜が明けた。

次の日、ミアちゃんの呻き声で目が覚めた。

隣のベッドでミアちゃんが姉貴の足の下でもがいている。

早速助け出して、姉貴を起こすと何でもないような顔でおはようの挨拶だ。

半分寝ぼけている姉貴を無理やり着替えさせて裏の井戸へ顔を洗いに連れて行く。

朝食は黒パンに野菜と薄切りの肉を挟んだサンドイッチみたいなものだった。

きれいに平らげ、お茶を飲んでいるとおばさんが紙包みを持ってきた。

「これは肉のお礼だけど、今日からハンターをするんだろ。・・
いいかい。昨夜のハンターも言ってたけど、無理はするんじゃないよ。」

「心配かけてすみません。大丈夫ですよ。無理はしません。」

姉貴が、おばさんに微笑んで答えてる。でも、俺は誤魔化されないぞ。（絶対に無茶しますよ。）っていう顔だもの。

家並みから外れている宿屋からギルドへの道は結構な距離だ。

身一つで依頼がこなせるように装備を整えているので、ザックは一時的にギルドに預かってもらうために持参してきた。

朝早いせいか、村の大通り？には余り人がいない。たまに家の前をほづきで掃除しているおばさんやお爺さんを見かけるとおはよう！と挨拶するが、その度に丁寧に挨拶を返されるので疲れてしまう。
・・まあ、挨拶は礼儀の始まりって言うし、悪いことではないけれど・・

「おはようございます！」って、元気な声で姉貴がギルドに入っていく。俺も遅れないように後に続いた。

つかつかとカウンターの・・・昨日出会ったお姉さんのところに歩いて行く。

「おはようございます。このザックを2つ預かってください。それと私達にお勧めの依頼を紹介してください！」

ニコリとしながらそう言った。・・・いいのかな？

カウンターのお姉さんも、びっくりしてたようだが、ああ！と手を打って納得したようだ。

要するに、俺達は字が読めない。依頼板の依頼用紙の内容も判らない。だったら聞けばいい。という訳だ。

「困りましたね。・・・所で持ち合わせがありますか？ ガイドを雇うのも良い方法だと思うんですけど。」

「「ガイド？」」

「はい。黒カードの人達が一時的にボランティアでハンターのガイドをしてるんです。それなりの経験もありますし、何と言ってもその人に合った依頼を選別してくれますよ。それと、荷物の預かり料は依頼期間中1個5Lになります。」

姉貴の頭に？が2、3個浮かんでるのが見える。

「ガイドの料金ってどうなりますか？」

「レベルによっても違いますけど・・・「ヨウマチ」さんなら黒レベルの初めでいいと思います。それでしたら20Lが前金そして完了報酬の1／2割程度ですね。」

意外と安い。さすがボランティア。と思うほどの料金だ。手荷物

預かりも駅のコインロッカー程度の値段だ。

「お願いします。今日からお願いできますか？」

姉貴はポーチの中の布袋からお金を渡した。

「ちよつと待って下さいね。・・大丈夫です。今、呼んで来ますね。」

お姉さんはそう言うのとカウンターから離れ、奥の階段を上っていった。

しばらく待つと、お姉さんと一緒にミアちゃんと同じようなネコ耳のお姉さんが下りて来た。カウンターの扉を開けて俺達のところに来てくる。

「彼女がガイドのミケランさんです。黒1つですからお役に立つと思いますよ。」

彼女をそう言うて紹介するとカウンターに帰っていった。

「ガイドのミケランにや。・・先ず皆のレベルが知りたいにや。」

ミケランさんをよく見るとミアと少し違っていた。

きれいな顔は丸顔で白いピンとしたひげがほっぺから何本か出ているし、シャツから出ている腕も短い毛に覆われている。

でも、使い古された皮の鎧と腰に下げた片手剣がにとてもよく似合ってる。

「これが私のカードです。アキトとミアちゃんも出しなさい！」
ミケランさんは、俺達が出したカードをしばらく見ていた。

「これだと、採取系の依頼がいいかもにや。」

そう言つて俺達のカードを返してくれた。

「こっちにや。」

俺達はミケランさんに連れられて依頼板の一角に行った。

「この辺りが、皆のレベルに合った採取依頼にや。何かしたいことはあるかにや？」

「え〜と・・・初めてだから、簡単で高額になるのがいいんだけど。」

「

「ん〜と・・・この辺かにや。アリット茸の採取にや。東の森にあるはずにや。」

「アリットにやらミーアも判るよ。村の森にもあったもの。」

ミケランさんは「賢いにや！」ってミーアちゃんの頭を撫でている。

姉貴は俺を見て小さく頷いた。どうやら、アリット茸採取を引き受けるみたいだ。

まあ、キノコ狩りだし・・・ミーアちゃんも知ってるみたいだから危険もなさそうだ。

「じゃあ、それにします。この後、どうするんですか？」

「これをカウンターに持っていくにや。」

ミケランさんは依頼板から用紙をひっぺがしてカウンターのお姉さんの所に持って言った。

「これにするにや。」

どれどれとお姉さんは用紙を見ていたが、「はい。判りました。」って言うのと、大きな判子を用紙にペタンと押した。

「確かに依頼の受領確認を致しました。アリットは1本6Lで引き取ります。10本以上が完了条件になります。期限は3日ですの

で注意して下さい。」

そう言って、姉貴に用紙を渡してくれた。
早速出かけることにする。

「「では、行ってきます！」」

俺達はカウンターのお姉さんに元気よく挨拶してギルドを出発した。振り返るとお姉さんが小さく手を振っている。

「ところで、準備したほうがいいものつてありますか？」

姉貴が、ミアちゃんと手をつないで先頭を歩くミケランさんに恨めしそうに聞いている。ミアちゃんと手を繋ぎたかったのか？

「そうだにや・・籠があると便利かもにや。後は、お弁当だにや。」

ミケランさんの意見を取入れ、途中の雑貨屋で小さな籠（それでもミアちゃんが背負うと大きく見える）と、乾燥させた肉を購入した。

村の中の十字路を東に曲がって進むと村を囲んだ柵の門に出た。

「ミケランじゃないか。今日も薬草の採取か？」

「今日は、ガイドにや。東の森でアリットの採取にや。」

どうやら門番さんと顔見知りらしい。「気を付けて行けよ！」の励ましに送られて俺達は東の森へ続く道を歩き出した。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7642y/>

ユグドラシルの樹の下で

2011年11月27日10時48分発行